

目 次

はじめに

Chapter 0	プロローグ——「セクシュアリティと法」とは何か？	I
1	はじめに	1
2	今、なぜ「セクシュアリティと法」か	2
3	「セクシュアリティ」をどう捉えるか	3
4	本書の構成	5

第 I 部 人間身体と法

Chapter 1	性 別——法的性別の根拠は？	8
1	はじめに	8
2	法的性別	8
3	性別の基準	11
4	これからの性別の基準	17
5	おわりに	20

Chapter 2	性同一性障がい——性別違和をもつ当事者に法は応答できているか？	23
1	はじめに	23
2	概念の変遷	25
3	当事者が直面する法的な問題と対応	28
4	特例法適用の要件	30
5	特例法適用の効果	35
6	おわりに	36

Chapter 3	性刑法——誰をどのように守るものであるべきか？	38
1	はじめに	38
2	強かん罪とその背景	39

3	女性の性的自由	41
4	ジェンダー／セクシュアリティ中立性	45
5	性暴力という再構成	47
6	おわりに	49

❖ *Column* ① 妊娠・出産 51

第Ⅱ部 社会関係と法

Chapter 4 親 子——性的マイノリティは親になれるのか？ 54

1	はじめに	54
2	性同一性障がい者は父親になれる？	54
3	何が問題となったか	56
4	家庭裁判所・高等裁判所の判断	60
5	最高裁判所の判断	61
6	最高裁判所の判断の意義	64
7	おわりに	65

Chapter 5 婚 姻——カップルの特別扱いに合理性はあるか？ 67

1	はじめに	67
2	同性婚の焦点	68
3	性愛標準性批判	71
4	おわりに	77

Chapter 6 暴 力——DVは異性間だけの問題か？ 79

1	はじめに	79
2	性的マイノリティに関するDVの実情	80
3	支援につながりにくいこと	82
4	支援体制はどうなっているのか	86
5	おわりに	89

Chapter 7 企業——企業が性的マイノリティにできることは？ 91

1 はじめに	91
2 企業活動と人権	92
3 国際人権基準とLGBT	95
4 ビジネスとLGBTの人権	97
5 おわりに	102

Chapter 8 学校教育——「性の多様性」学習の保障に向けて必要なことは？ 103

1 はじめに	103
2 学校現場で何が起こっているか	103
3 カリキュラムのなかの性の学習、性の多様性についての学習	107
4 公的機関における性的マイノリティをめぐる教育への対応	109
5 これからの学校と教育の課題	114
6 おわりに	116

❖ **Column ② 米国のLGBTとアダプション** 118**第Ⅲ部 言説空間と法****Chapter 9 人権——誰のどのような人権か？** 122

1 はじめに	122
2 性の多様性が強調される時代	123
3 多様性から取りこぼされていくもの	127
4 同化か抵抗か：包摂の政治と承認の政治の分岐点	129
5 おわりに	131

Chapter 10 ノルム——平等か解放か？ 133

1 はじめに	133
2 日本で最初の同性婚？	134
3 オーバーガフェル事件判決にみられる問題点とは何か	135
4 ノルム概念をめぐる2つの分析的系譜	137
5 親密圏の正常化：ヘテロノーマティヴィティへの批判	139
6 おわりに	142

Chapter 11 クィア——クィアな視点は法学に何をもたらすか？ 144

- 1 はじめに…………… 144
- 2 主題としてのクィア…………… 144
- 3 方法としてのクィア…………… 148
- 4 フェミニズムからクィア理論へ…………… 151
- 5 おわりに…………… 154

❖ *Column* ③ 法と科学とセクシュアリティ 155

Chapter 12 エピローグ——「セクシュアリティと法」のゆくえ 157

- 1 セクシュアリティから法を問いなおす…………… 157
- 2 2つのセクシュアリティの接点…………… 159
- 3 「セクシュアリティと法」のゆくえ…………… 160

引用・参考文献一覧

判例索引

編者・執筆者紹介